

意味を伝えるための英語発音 —
「ここが重要」テルキ デイブ¹English Pronunciation for Conveying Meaning —
“This is Important”Dave Telke¹

Just as people express themselves, not with individual words, but in sentences, so too the teaching of pronunciation should focus not merely on saying sounds and words correctly, but on pronouncing entire sentences so they properly convey the intended meaning in context. This paper describes the fundamental way in which English native speakers convey meaning by pronouncing important elements of the sentence so they stand out (i.e. loud, higher in pitch, slow and clear), while less- or non-important elements do not stand out (i.e. soft, lower in pitch, short and not clear). Failure to understand this basic principle results in a flat “reading voice”, where intended meaning is often difficult for the listener to grasp. Pronouncing non-important elements so they stand out, on the other hand, produces sentences with different meanings altogether. The paper also describes how this principle applies to listening strategy, and suggests it be taught at the beginning level together with grammar as an essential part of sentence construction and sentence meaning.

1. 文章を文章として

従来の英語の勉強は単語や簡単な挨拶の学習から始まります。しかし、言語によるコミュニケーション、つまり言いたいことを相手に伝えること

¹ 白鷗大学教育学部

e-mail : dat@cat.email.ne.jp

は、1単語のみ、あるいはいくつかの単語をただ適当に並べるだけでは不十分です。言いたいことの意味がよくわかるように相手に伝わるには単語を「文章」にアレンジしなければなりません。そのためには、文や文章に関する法則「文法」も習う必要があります。

英語を「書き言葉」として考えれば単語と文法だけで十分ですが、近年、英語を話したいという希望者が増え、学校でも、英語を話すことに力点を置く傾向が見られます。そこで、大きな問題となるのが英語の発音です。

英語の発音と言えば、「音」「音声」、あるいは英和辞典に表記されている「発音記号」を想像されるでしょう。そのために、CDを聴いたり練習したりして、それぞれの単語が正確に発音できるようにがんばるわけですね。単語の発音さえうまくできれば、英語の発音は完璧、と考えられる方が多いかと思います。

しかし、コミュニケーションというのは単語を一つ一つ正確に発音していくだけではだめなのです。そんなことをすると、せっかくの文章が一つ一つの単語にバラバラに分解されてしまいます。やはり、意味を伝えるための発音とは、単語を文法によってアレンジして文章をつくるのと同じく、単語を声の調子によってアレンジして、文章を文章として発音しなければなりません。

この論文では単語確認のための「音」「音声」ではなく、言いたいことを相手に伝えるときにネイティブ・スピーカーなら文章をどう発音するのかを考え、その重要なポイントの一つを紹介したいと思います。

2. 「右側の扉…開きます」

英作文の授業でよくできたものをみんなの前で発表してもらっています。ところが、私が読んですごく面白く書かれていると思った文章でも、学生が声を出して発表すると、たいていが活気のない棒読みでつまら

ない。もっとひどい場合は、何を言おうとしているかさえうまくつかめないのです。それは音が悪いとか、単語の発音が良くないといった音声の問題よりも、単語がどう組み立てられているかさえも、よくわからないのです。もっと元気に声を出して発表してもらいたいと思うのですが、元気な声だけでは…。たとえば、こういう例もあります。

少し前の話ですが、東京でJRの電車に乗っていると、駅に入る直前に、

The doors on the right side will open.

The doors on the left side will open.

と、女性の声で案内が車内に流れました。この女性は英語の「音」をかなり勉強しています。それぞれの単語をきれいに発音しているし、伝えようとしている意味もよくわかります。しかし、長時間乗っていて、駅に入るたびにこの声が流れてくると、ネイティブ・スピーカーなら次第にイライラしてきます。音がきれいなのに、彼女の発音には何か気に障るものがあります。それは何なのか、日本語の例で説明しましょう。

たとえば、あなたが外国の大都市を訪れて、電車か地下鉄に乗っているとしましょう。その都市に日本人の観光客が多いので、車内放送は日本語でもやっています。すると、駅に入るたびに、

「右側の扉は開きます」

「左側の扉は開きます」

と流暢な日本語が流れてきます。最初は何ともないかも知れませんが、繰り返し同じことを聞かされているうちに、だんだんイライラしてくるでしょう。発音は上手で、言おうとしていることもよくわかりますが、せっかくそこまでやるなら、せめて正しく言ってほしいところです。ちょっとした文法上のミス、外国人が苦手の「は」と「が」の違いですが、

「右側の扉が開きます」

「左側の扉が開きます」

と言ってくればいいのにね。この小さな違いだけでも、文章の意味にこれだけの違いがでてくるわけです。

英語には「は」と「が」がありませんが、少し前までの彼女のThe doors on the right side will open.の発音だと、「右側の扉は開きます」という意味の英語になっていました。どういうことか説明しましょう。

3. 重要なところを目立つように

文章というものはいくつかの単語から構成されますが、言いたいことを伝えるためにはすべての語が同じ程度に必要、というわけではありません。文章の中ではやはり重要なところもあれば、そうでもないところもあります。話すとき英語のネイティブ・スピーカーは言いたいことをうまく相手に伝えるために、文章の重要なところを目立つように発音し、話の中で言っていることや、状況などで当然相手にわかること、また形だけの文法など、そう重要でないところを目立たないように発音します。

すごく単純なことです。英語を英語らしく話すためには最も肝心なことなのです。「ここが重要だよ」と目立つように発音することによって声の調子に変化があって、つまらない、意味をつかみにくい棒読みがなくなり、たとえ周りがうるさくても、話を聞いている相手は話の大事なところをちゃんと聞き取れるし、記憶にも残ります。何と合理的な話し方でしょう。

ただし、話すときは相手に何を伝えたいかを常に考えていなければなりません。重要ではないのに「ここが重要だよ」と目立つように発音すると、

JRの車内放送のように全く違う意味を伝えることになってしまいます。

彼女はきれいな音の生き生きした声で案内してくれますが、伝えたい重要なところを目立つように、という根本的な話し方は習っていません。したがって、いちばん目立つところを囲って書くと、彼女のアナウンスは次のようになります。

The doors on the right side **will open.**

The doors on the left side **will open.**

「右側の扉が開きます」「左側の扉が開きます」の意味で言っているのに、実際に言っている文章は、左右いずれかの扉について、「開きます」、つまり「右側の扉は開きます」「左側の扉は開きます」というのでした。これを何回も聞かされた英語のネイティブ・スピーカーがイライラするわけをおわかりになるでしょう。

電車がホームに入ると扉が開くのは当然。「開きます」なんて、何の役に立たない情報ですよ。乗客の知りたいのは、右か左かどっち側ということなのですから、

The doors on the **right** side will open.

The doors on the **left** side will open.

と、車内が込み合っておりうるさくても聞き取りやすく、間違えのないように言ってあげることです。重要な情報を目立つように発音するというのは、どこに行っても英語圏共通の話し方なのです。同時に、コミュニケーション上の相手に対する「思いやり」とも言えるでしょう。

初めに言ったようにこの車内放送の話は少し前の話です。この間久しぶりに東京に行って山の手線に乗ったら、

The doors on the right side will open.

The doors on the left side will open.

と、乗客の知りたい情報を伝えるような、より英語らしい放送となっていました。きっと英語を話す乗客から文句があったのではないかと思います。そして、彼女はその文章の「正しい発音」を教えられて、吹き込みをし直しました。しかし、これで彼女は意味を伝えるための英語発音がわかったかと言うと、そうでもないようです。なぜなら、帰りの電車内放送では、

This train is bound for Utsunomiya.

The next stop will be Hasuda.

など、相変わらずどうしようもない情報を伝える言い方をしていたのです。

4. 目立つようにってどのように？

言いたいことを相手に伝えるには、文章中の重要なところを目立つように発音するということですが、具体的にはどのように発音すればよいのでしょうか。

まず、重要なところをより強く発音します。同時に声のピッチをやや高めにします。次に、英語独特の特徴かもしれませんが、重要なところを聞き取りやすいように音を長く伸ばしてゆっくりと発音します。もちろん音をはっきりと発音します。

もうおわかりでしょうが、このことを語学では「強勢」とか、「アクセント」「ストレス」と言っています。通常は単語について用いる用語で、英和辞典では見出語の第一強勢 / ˈ /、第二強勢 / ˈ / と表記されています。文章の場合は、「文強勢」という言い方があります。文強勢は、のちに述べるように、話し手が相手に伝えたい意味を切り離して解説することが多いの

で、この用語を使いたくはありません。

意味を伝えるために重要なところを目立たせるように発音するならば、それほど重要でないところを逆に目立たせないように発音する、というのが英語の話し方です。これを下の表にまとめてみましょう。

英語の話し方

重要なところ

重要でないところ

目立つように

目立たないように

音を強く

音を弱く

高め

低め

長く、ゆっくり

短く

はっきりと発音する

はっきりしないように、
ときに音を崩して発音する

5. 音を崩すなんて、本当？

意味を伝えるために文章中の重要なところを強く、高めに、ゆっくり、はっきりと発音することはよくわかります。重要でないところを弱く、低めに、短く発音することもわかりますが、せっかくの単語だから、わざとはっきりしないような発音をするとか、音を崩すなど、“本当にありうる？”、と納得できない方がおられるかもしれません。しかし、よくよく考えると、音の崩し方は学校の英語ですでに習っているはずです。見出語の「強」「弱」の発音と短縮形がそうです。

1. 「強」「弱」 英和辞典を見ると、ある機能語について二つの発音が表記されています。たとえば、

you	《強》 ju:	《弱》 jə
him	《強》 him	《弱》 ɪm, əm
and	《強》 ænd	《弱》 ənd, ən, n
to	《強》 tu:	《弱》 tə, tʊ

などとあります（文献①）。こうした語の元の母音を、より力を入れない母音の/ə/とか/ɪ/、ときには/i/や/u/、あるいはどちらの母音かはっきりとつきとめられない音にします。himのhやandのdなどの子音の場合、音の流れの中でちゃんと発音することが少しめんどくさいと、省くことがあります。英語の学習者は「強」の発音と「弱」の発音を形として習いますが、どの形をどんな時に用いるのかということについては、あまり説明されていません。一方、ネイティブ・スピーカーにとっては、形よりも過程なのです。つまり、言いたいことを伝えるため重要なときには、はっきりした発音（「強」）をしますが、意味として重要でないときは、発音にあまり気を使う必要がありませんので、より楽な発音（「弱」）へと音を崩してしまいます。

2. 短縮形 学校で次のような短縮形をいろいろ習います。

I am⇒I'm	you are⇒you're	they are⇒they're
he is⇒he's	she is⇒she's	it is⇒it's
what is⇒what's	who is⇒who's	how is⇒how's
I have⇒I've	you have⇒you've	they have⇒they've
could have⇒could've	would have⇒would've	should have⇒should've
I had⇒I'd	you had⇒you'd	they had⇒they'd
he had⇒he'd	she had⇒she'd	

I will⇒I'll	you will⇒you'll	they will⇒they'll
he will⇒he'll	it will⇒it'll	who will⇒who'll
I would⇒I'd	you would⇒you'd	they would⇒they'd
is not⇒isn't	are not⇒aren't	
was not⇒wasn't	were not⇒weren't	
have not⇒haven't	has not⇒hasn't	had not⇒hadn't
will not⇒won't	would not⇒wouldn't	should not⇒shouldn't
do not⇒don't	does not⇒doesn't	did not⇒didn't
cannot⇒can't	could not⇒couldn't	

短縮形はほかにもたくさんあります。I am、I have、I willなどは普通の会話で音を落として発音することが多いので、書く場合もI'm、I've、I'll、と落とされた音を〔〕で表すようになっていきます。I'm going to go see a movie tomorrow. など、短縮形で書くのがあまりにも一般的になっており、I am going to go see a movie tomorrow. などと書くのが恥ずかしいくらいになってしまいました。学校では原形と短縮形の二つの形を習い、「短縮形を使うことが多い」と説明されますが、短縮形を使うのは伝えたい意味として重要でないときのみ。I amなどが意味として重要なこともあり、このときは短縮しない、つまり音を崩さないのです。

さらに、ain't (am not, are not, is not)、goin' (going)、gonna (going to)、wanna (want to)、coulda (could have)、shoulda (should have)、woulda (would have)など、いわゆる「非標準」の語もあります。会話などを文章にするとき確かに「程度低い」「無教育」「下品」という印象を与えるためにこれらの語を使うことがあります。しかし、これらの語の表す発音はネイティブ・スピーカーにとって現実の普通の発音にすぎないのです。つまり、こうした語は、「弱」の発音と短縮形とともに、音を崩す過程の一段階なのです。例として

「誰に電話をかけるの?」の英文を見ましょう。

Who are you going to call?	(正式に書かれた文章)
Who're you going to call?	(短縮形)
Who're you gonna call?	(見た目は下品が、発音として普通)
Who're ya gonna call?	(同じく。yaはyouの「弱」/jə/ のスペル)
Who ya gonna call?	(areを完全に落とした。これも普通の発音)

これで音の崩し方がわかりましたが、意味として重要でないからと言っても、なぜ英語のネイティブ・スピーカーがこのような音を崩してまでわざとはっきりしない発音をするのか、まだよくわかりません。これに答えるためには、英文の中のどこが重要か、あるいはどこが重要でないかが、どうしてわかるのかについて考える必要があります。

6. どこが重要か、どこが重要でないか

6-1. 文強勢の解説

英語の文法の解説が文法学者に任せられているのに対して、英語の発音の解説は音声学者に任せられています。音声学というのは人間の言葉に使われる音を研究する学問で、英語の場合、音声や単語の正しい発音を解明しています。文章の発音も一応説明しています。この場合、強く発音することを、上記4. で述べたように「文強勢」と言って、次のように説明されています。

「文を読む際にどの語を強く、どの語を弱く言うべきかが問題となってくる…非常に大ざっぱに言えば、重要な語が文強勢を受けるとい

ことになるが、外国人である日本人学習者には、英語の文の中でどれが重要と考えられるかという点になると、はなはだ心もとないのである」(文献②p.83)

そこで英語の単語を(a) 文強勢を受けやすい語(名詞、動詞、形容詞、副詞など)と、(b) 文強勢を受けにくい語(代名詞、接続詞、前置詞、冠詞など)の、二つに分けています。もちろんこれだけではうまくいかないので、文強勢を受けやすい語でも受けない場合と、文強勢を受けにくい語でも受ける場合、という「例外的」文強勢を数々のルールや、用法などによって細かく説明しています(文献②pp.83~102)。

上の解説の問題としているもの、つまり、「どの語を強く、どの語を弱く言うべきか」はよくわかります。しかし、次に言う「重要な語が文強勢を受ける」とは、文法学者たちがよく使うような言い方で、言葉を話すことから人を切り離して、言葉の働きを形式化して解説しようという考え方なのです。重要な語が「文強勢を受ける」よりも、その人は言いたいことがあって、相手に伝えるために重要なところを「目立つように発音する」という考え方のほうが学習者のためになると思います。

どっちにしても、問題は英語の文章の中のどこが重要かということですね。上の解説によると、どこが重要かを考えることは日本人学習者には無理だと言っています。確かに文法学者は文の形を重視して、文の意味に興味を示さないことが意外と多いし、音声学者の場合、音・発音が専門で、文の意味などを考える必要がほとんどありません。英文中の重要なところを考えるのは自分には無理だと言うのならわかりますが、日本人学習者には無理だとは言いつてではないでしょうか。とにかく、英語の文章の中の強く言うところ、つまり文強勢を受けるところを、その人がその文章で相手に伝えようとする意味を無視して解明しようと言っているのです。

そこで英語の単語を「文強勢を受けやすい語」と「文強勢を受けにくい

語」に分けています。つまり、文章レベルの現象である文強勢を、文章を単語に分離して単語レベルで、つまり単語の種類として説明しています。このやり方は言語学の観点から見て納得できないだけではなく、英語のネイティブ・スピーカーとして、「あっ、この語は文強勢を受けやすい語だから強く発音しよう」とか、「この語は文強勢を受けにくい語だから弱く発音しよう」など、ただの一度も考えたことがありません。さらに、伝えたいという意味から考えると、ルールなどで説明しなければならない「例外的」文強勢というものなんかはあるはずがないのです。

英語の文章の中のどこが重要かを考えるのが日本人学習者にとって本当に無理なのでしょうか。たとえば、英語の文章があって、それに相当する日本語の文章があるとします。後者の場合、その中のどこが重要かはちゃんとわかるでしょう。だったら、英文も同じ意味を表しているので、その中の同じところが重要なはずなのではないでしょうか。英語と日本語の文章を比べてみましょう。

6-2. 一語ずつ置き換える

まず、学校の英語で習うような簡単な会話を見ましょう。

A: How are you?

B: I'm fine.

And you?

ご覧のように、I'mと短縮形になっています。ここが重要ではないから音を崩すのが書く文章でも普通になっています。最初はI am fine. と書いてみましたが、書くのが恥ずかしくて短縮形に直しました。

さて、これに相当する日本語はどうか。学校で英文を日本語に直す

際に、英語の文章にあるすべての単語を一語ずつ同じ意味の日本語の単語に置き換えるという方法がよく使われると思います。これでやると、次のようになります。

A: How are you?	きみはどうだい？
B: I'm fine.	ぼくは元気だよ。
And you?	そして、きみは？

この会話は短いし、英語のyou、I、andを「きみ」「ぼく」「そして」と訳してもさして気にならないが、もっと長い会話やお話、小説などを、英語のすべての単語を一語ずつ日本語に置き換えて訳してご覧なさい。できたものはコンピュータがやるような翻訳で、変な日本語。そんなのを読むのは面倒くさくてつまらない。著者は何を言おうとしているか、言葉が多すぎてうまくつかめない。翻訳としては失格だ。

英文にあるすべての単語を機械的に一語ずつ置き換えるよりも、その英語がその場で伝える意味を理解し、これと同じ意味の、普通の日本語にしたほうが英文に合致する文章になり、それこそが本物の翻訳なのです。そこで会話をもう一度考え直してみましょう。

6-3. 文法として必要、意味として重要でない

AのHow are you? はBに向かって言っているし、そのことを伺っていることはBも当然わかっています。英語の文法として代名詞のyouが必要ですが、日本語だと、主語・目的語などが話し手と聞き手の間にはっきりわかっているれば、あえて代名詞などで示す必要はありません。したがって、普通の会話では「きみは」は必要なく、「どうだい?」だけで十分です。BのI'm fine.も同じ。英語は文法として代名詞のIが必要ですが、日本語はいらな

い。「元気だよ」だけでいいです。(もっと詳しい説明は文献⑥「aとtheのココロ」Lesson 1、8、10参照)

BのAnd you?のyouは違います。同じ代名詞ですが、この会話ではAの元の問いHow are you?をAに問い返す役割をしており意味としては重要なので、英語でも日本語でも言わなければなりません。日本語は「きみはどう?」と言いますが、「どう」を省略して、「きみは?」という言い方もできます。「きみはどう?」に相当する英語はWhat about you?/How about you? がありますが、日本語の「どう」と同じように、What about/How aboutを省略できます。しかし、「きみは?」はYou? 単独ではだめで、文法的にはandを付けて、And you?と言わなければなりません。この場合のandを「そして」とか「で」と訳すと、英語にない意味を加えることになります。英語を一語ずつ日本語に置き換えるとこのような間違いがよくでてきます。

すると、英語の会話と相当する日本語は次のようになります。

A: How are you?	どうだい?
B: I'm fine.	元気だよ
And you?	きみは?

このように書いた文章を見ると英語のほうはyou、I、andと単語が多いが、英語のネイティブ・スピーカーがこの会話を普通に話すとどうなるでしょう。

AはBに向かってHow are you? と尋ねるが、Bのことを伺っていることは当然わかっているので、文法として必要だったyouは、意味として重要ではない。したがって、ネイティブ・スピーカーは目立たないように弱く、低く、速く、音を崩して「弱」の /jə/ (スペルはya) と発音します。I'm fine. のIも同じ。文法として必要ですが、意味、情報として重要ではないので、弱く、低く、速く発音します。英和辞典を見ると、Iの発音は /ai/ で、「弱」は表記されていないが、実際、人や場合によって /ai/ の音を /ə/ のような

あいまいな音で言ったり、あるいは、なくしたりすることもあります。and も意味として重要でないの、/n/ と崩します。音を崩すところを小さく書くようにすると、会話は次のようになります。

A: How are _{ya} ?	どうだい？
B: ' _m fine.	元気だよ。
' _n ' you?	きみは？

つまり、英語の文章も日本語の文章も同じ場で同じ意味を伝えるのであれば、日本語の文章にある重要なものは、英語の文章でも重要で目立つように発音します。英語の文章にあるが日本語としていないものは、英文でも重要ではないから、目立たないように音を崩して発音します。崩さないで、はっきりと目立つように発音するとどうなるかと言うと、日本語の文章に言わなくてもいい言葉を入れるのと同じで、話を聞く人にとって面倒くさくてつまらなくなってしまう、言おうとしている意味がつかみにくくなります。

では、意味を伝えるための英語発音をより精密に表すために次の書き方をしてみましょう。その文章で相手にいちばん伝えたいところを囲って、文法的には必要でも意味としては重要でないところを小さくして、その間のけっこう重要なところには下線を引いて、まあまあ重要なところをそのまま書きましょう。すると、電車内の放送は次のようになります。

The doors on the right side will open. 「右側の扉が開きます」
 The next stop after Omiya will be Hasuda. 「大宮の次の停車駅は蓮田」
 This train is bound for Utsunomiya. 「この電車は宇都宮行きです」

このように、「ここが重要」「ここが重要でない」と、文章を文章として発音すれば、意味がよく伝わる、英語らしい発音になります。

7. リスニングの作戦

7-1. 知らない単語をすぐ引け

従来の英語教育は何かと言えば、単語とその取得が中心。もちろん、文法も、構文も、意味も大事ですが、これらは「単語あってのものだ」。もっと極端に言う、単語さえわかっていれば、「文法などはその後についてくる」と言われています（文献③p.2）。このため、英語を読んだりして知らない単語が出ると、止まって、その場ですぐ辞書を引けと、教えているのではないかと思います。なにしろ、その文章のすべての単語を「押さえておかないことには、全体を眺めることなどできはしない」と言われています（文献④p.2）。

上のような考え方が実際にどこまで中学生や高校生に押しつけられているかわかりませんが、大学生のリスニングに影響を及ぼしていることは間違いないです。最近あった例を見てみましょう。

児童教育専攻学生の授業で使っている教科書（文献⑤）のレッスンはそれぞれ幼稚園での出来事をテーマにしています。CD付きで、レッスンごとに Listening Comprehension と言って、テキストに書かれていない短い会話が収録されています。これを聴いて書くのを宿題としています。会話の中に聞き取れないところがあったら下線を引いて、クラスで確認し合うというようにしています。

この前のレッスンは「ホットケーキの日」で、Listening Comprehension は子供たちがホットケーキの生地をつくときの会話でした。ところが、先生がいちばん最初に言ったことがどうも聞き取りにくかったらしい。多くの学生が

Children, please do not touch _____ pan. It's getting hot.

と書いてきました。下線の代わりに direct cut とか、direct it、direct hit などのように聴こえた人もいたが、何のことかよくわからないと言っていました。

でも、この一か所がうまく聞き取れなくても、先生が子供たちに伝えようとしていることはだいたいわかるでしょう、と言うと、「わからない」と言う。どうしてわからないかと聞くと、「まだ考えていない」と言う。だって、言おうとしている意味が大事でしょう。なぜ考えていないか、と聞くと、「何回聞いてもここが聞き取れないから」と言うのです。

まさに、文章のすべての単語を「押さえておかないことには、全体を眺めることなどではしない」をリスニングへ持ち込んできています。つまり、単語を一つ一つ聞き取れることをリスニングの第一目的としています。何回聞いてもうまく聞き取れないとなると、その文章の意味や会話全体の内容を眺めようとしなくて、止まってしまいます。わからないまま終わってしまいます。

しかし、すべての単語を確認しないと全体の意味を眺めることができないというのは一つの意見にすぎないのです。ほかのやり方もあります。

7-2. 知らない単語を全体から考える

大学一年の時にドイツ語を学び始めましたが、読み方について先生は次のように述べました。知らない単語が出たら、止まって辞書を引くなどしないで、先を読みなさい。それから知らない単語の意味を前後関係や全体から自分で考えなさい。よく使う単語ならまた何回も出てくるからそのうちにわかるし、あまり使わない単語なら、引いても忘れるだけだ、と。

CDなどのリスニングについても同じことが言えます。何回聞いても聞き取れないところがあると、お手上げじゃなくて、前後関係や全体などから自分で考えなさい、ということです。

上の例文だと、まず先生がいちばん目立つように発音しているところを囲って書きましょう。

Children, please do not touch _____ pan. It's getting hot.

英語の話し方から言うと、いちばん目立つところがいちばん伝えたい情報というわけです。panとは、料理用のなべの一般名称で、おそらくホットケーキを焼くのに用いるでしょう。

つまり、「なべ、触るな、熱い」と、子供たちに注意するように言っている文章と考えていいでしょう。下線、またはdirect cutなどのように聞こえたところはそんなに目立たないように発音しているので、情報としてそんなに重要ではないということになるが、もっと広く見て、全体から何なのかを突き止めてみましょう。

この会話についてのイラストと○×問題が見開きの右ページに書かれています。左ページを見ると、ホットケーキ作りに使う材料（pancake flour, milkなど）とそれぞれのイラストがあって、その下には、①～⑤のホットケーキ作りの過程と各段階のイラストが描かれています。①は生地づくりですが、②は、Heat the pan.（なべを温める）とあって、イラストはホットプレートのスイッチを入れるところが描かれています。「ホットプレート」は英語のhot plateですが、このレッスンではhot plateという単語を使わないで、「なべ」と言っています。何のなべかと言うと、「電気のなべ」。「電気のなべ」は英語でelectric pan…なるほど！

Children, please do not touch ____ electric pan. It's getting hot.

と、先生は言っていたのです。

ほんの一例だけですが、このように聞き取れないところを前後関係や全体の内容から考えるやり方のほうが、すべての単語が聞き取れないとば

うっとしてしまうよりも、リスニングの作戦としては得るものが多いのではないのでしょうか。

改めてリスニング作戦の要素を述べましょう。

1. 話し手の伝えようとする意味・内容をつかむことを第一目的とする。
2. 英語の話し方では、重要情報を目立つように発音する。
3. いちばん目立つところが意味としていちばん重要なので、これが聞き取れれば、全体の意味がだいたいわかる。
4. 言おうとしていることがだいたい分かったら、前後のことなどから、聞き取れない部分を考える。

しかし、上の例文のelectric panの前に d のように聞こえて生徒を困らせた何かがまだ残っていました。この音は何なのでしょう。

7-3. 列車よりも波

日本語の話し方と言えば、単語を一つ一つ分けて発音するし、日本語を聴いていると、単語が一語一語と列車のように通りすぎて行く感じです。しかし、これと同じ感覚で英語のリスニングをしようとすると、うまくいきません。第一、英語のネイティブ・スピーカーは単語を一つ一つ分けるような話し方をしないのです。話をよく聞くと、単語と単語が融合し、はっきりした境目がなくなったりします。このため、英語の文章は、列車よりも、波のように流れ、波がしらを滑るサーフボードのように重要情報を運んできます。

単語の融合はいろいろな形があり、英語のリスニングが難しい理由の一つです。あいにく、この論文のテーマを外れて取り上げられませんが、上

テルキ デイブ

の例文の d だけは説明しておきましょう。

先生の実際に言っている文章は、

Children, please do not touch the electric pan.

ですが、先生の発音ではtheの e とelectricの e が一つに融合し、

Children, please do not touch theelectric pan.

のようになっています。thの音が得意でない日本人は d に聞こえ、さらに l を r に聞こえ、direct cut や、direct it、direct hit と聞き違えていたのです。

8. 目立つところによって違う文章になる

英語は、単語を文法的に正しく並べておけば、言いたい意味を伝える文章になると、一般に思われているでしょう。書かれた文章だけ見ればそう考えられるかもしれないが、その文章の意味を声を出して相手に伝えようとすると、

The doors on the right side will open.

The doors on the right side will open.

の例で見たように、単語の並べ方が同じでも、目立つように発音するところによって全く違う文章になってしまいます。この例が特別でも何でもなく、英語のどの文章でもそうなるのです。

たとえば、Mark said he would be here at 3:00.という文章を見ましょう。これを日本語にするように言われると、「マークは3時に来ると言っていた」

と訳するのが普通でしょう。しかし、この意味になるためにはネイティブ・スピーカーは次のように発音します。

Mark said he would be here at 3:00. (3:00は“three”と読む)

ところが、このような文章を学生に読ませると、

Mark said he would be here at 3:00.

と、癖のようにhereをいちばん目立つように発音することが多い。しかし、そう発音すると、「マークは3時にどこにいるだろう」という質問に対して、「マークは3時にここにいると言っていた」の返事のように聞こえます。

また、「3時に来ると言っていたのはだれ」に答えるなら、Markに力を入れて、

Mark said he would be here at 3:00.

と発音しますが、声の調子を少し変えれば、「3時に来る人はいるかな」の答えにもなります。

Mark said he would be here at 3:00.

という文章は、「(他の人は知らないが) マークなら3時に来ると言っていた」の意味で使います。これと逆に、

Mark said he would be here at 3:00.

テルキ デイブ

という発音は、「マークは3時に来るとは言ったけれど」と、本当に来るだろうかという疑いを表す文章になります。

Mark said he would be here at 3:00.

は、「マークは間違いなく3時に来ると言っていた」という意味になりますが、声の調子によって、「普通だったら3時に行くのだったとマークは言ったけれど（用事か何かできた）」のような意味にもなります。

Mark said he would be here at 3:00.

は「マークは（前でも後でもなく）3時に来ると言っていた」のような意味になりますが、「きっかり」の意味を強調するなら、right at 3:00とか、just at 3:00、at 3:00 sharpなどの言い方を使います。

一例だけですが、どの文章でも目立つように発音するところを変えることによって、いくつもの異なる意味を表す文章にすることができます。しかし、ただの遊びではありません。

ネイティブ・スピーカーから言うと、同じ一連の単語がいくつもの意味になるということは常に無意識ながらも自分の中にあり、その場での言いたい意味を相手に伝えるための発音をすることは「話す」ことそのものです。たとえば、相手にどちら側の扉が開くかを知らせたいときは、

The doors on the right side will open.

The doors on the left side will open.

と言います。

The doors on the right side will open.

The doors on the left side will open

みたいな発音はできないのです。ありえないのです。これも話すときだけでなく、読むときも書くときも、その意味のその文章のその発音が、声を出さなくても、頭の中に聞こえるのです。

ネイティブ・スピーカーの発音はそうですが、学習者にとっては発音はどうなのでしょう。

9. 意味を伝えるための英語教育 ―「ここが重要」

「英語は学校で六年もやったができない」というのはよく耳に入る決まり文句みたいになっています。これに対して英語の教育者はどうするか。従来なら、「できない」は、「単語足りない」「文法足りない」と言って、それまでやってきた勉強をさらに強化するという対策をとりました。しかし、英語ができることは英語が話せることで、そのために英語の発音も大切だと、英語教育の方針が変わってきました。そこで、「発音」とは何なのかということになりますが、まず、英語の音声、単語の正しい発音、と考えるのが普通でしょう。それもそうですが、この論文では、言いたい意味を相手に伝えるためには、「文章を文章として発音」しなければならない、という考え方を紹介しています。どちらにしても、発音をいつ、どんな形で教えるかが課題となります。単語・文法の勉強の後に添加して、先生・生徒ともに背負わなければならない荷物として教えるか。それとも別の方法はあるのでしょうか。実例を見ながら考えましょう。

大学一年生に英語コミュニケーションを教えています。初日は英語で自己紹介をしています。My name is _____, という文章から始まりますが、英語力はまちまちです。上手な人は、

テルキ デイブ

My name is イカルタンキ.

というように言います。英語の発音があまり上手でない人は、日本語の音で

マイ ネーム イズ イカルタンキ.

と発音します。もっと下手な人は、

マー^イ ネー^ム イー^ズ イカルタンキ.

と、日本語でゆっくり強調するときの言い方、「私^の 名前^は _____ ^{です}」を取り入れて英語をはっきりと発音しているつもりでしょうが、特に name と is について、英語にまったくない音（語尾の母音）を「ここが重要だよ」と、英語としては全くありえない発音をしています。

しかし、英語の音声の上手・下手と関係なく、ほとんどの学生が伝えたい情報としていちばん重要な自分の名前をいちばん弱く、低く、速く、そして、日本語としてははっきりした発音かもしれないが、日本語ができない先生にとってはとても聞き取れない発音で、「ここは重要じゃないよ」と言うのです。

つまり、こうした学生は、英語＝単語＋文法、発音後回し英語教育の結晶と言っていいのでしょうか。では、この人たちにどうやって英語の話し方を教えますか。まず、相手に伝えたい意味・情報として考えましょう。

この場でやっているのは自己紹介でしょう。いちばん伝えたい情報は何ですか。そう、自分の名前。英語を話すときは、いちばん伝えたい情報をいちばん目立つように発音します。これが英語の話し方です。発音のルールとして覚えてもいいですが、ルールよりも相手に対する思いやりと思ったほうがいい。相手にぜひ聞いて覚えてほしいのですから、聞き取りやす

く、わかりやすいように、「ここが重要だよ」と言ってあげるのです。「目立つように」とは、どのように発音すればいいのでしょうか。もちろん強く言います。声が普通の調子より少し飛び出すように高めにします。重要なところですから、ゆっくり言わなければなりません。急いではだめです。最後にももちろんはっきり発音します。さて、自分の名前をもう一度言ってみましょう。

名前をうまく伝えることができれば、自己紹介を続けて、いちばん伝えたい情報を目立つように発音しながら練習しましょう。

I'm nineteen years old.

I live in Oyama.

I'm a student at Hakuoh University.

I like English. I don't like math.

もちろん自己紹介だけではなく、どの文章も「ここが重要だよ」と発音します。

ところが、違うところをいちばん目立つように言うと、全く違う意味の文章になります。What is your name? と聞かれたら、My name is Ikaru Tanki. 「イカル・タンキって、私の名前だよ」とか、My name is Ikaru Tanki. 「私の名前はイカル・タンキなんだよ。うそじゃない」と答えるのがおかしいでしょう。また、同じように、相手にすでにわかっていることや、状況・話の流れなどで明らかにわかることなどは、文章に入っても意味としてはそう重要ではないから、そんなに目立たなくてもいいように言うのです。

中には、日本語として言わなくてもいいが、英語として文章に入れなくてはならないものがあります。「明日、京都に行く」の英文だと、誰が行くか、動作が未来だ、を示す必要があるので、I am going to go to Kyoto tomorrow. となります。しかし、英語のネイティブ・スピーカーの発音をよく聞くと、

日本語の文章にある「明日」「京都」「行く」を目立つように言っているだけではなく、日本語の文章にない I や am going to はあまりはっきりと発音していないこともわかります。いわゆる「弱」の発音と「短縮形」ですが、元の音を崩して発音しています。つまり、わかっていることだから日本語として言わなくてもいいものは、英語としても重要ではないから音を崩します。

I am going to go to Kyoto tomorrow.

I'm going to go to Kyoto tomorrow.

I'm gonna go to Kyoto tomorrow.

Amana go da Kyoto tomorrow.

英語の話し方はもちろん説明を聞くだけでできるわけではありません。相当な練習が必要なのです。しかし、ある程度できるようになったら、話し方がすごく英語らしくなり、どこに行っても通じるようになります。

しかし、英語を六年間勉強してから初めて意味を伝えるための英語発音を教えるなんて、とんでもありません。英語を話せることを目標とする英語教育なら、即 This is a pen. の段階から、単語と文法といっしょに、英文構成の重要な一部として教える必要があります。

【参考文献】

- ① アンカーコズミカ英和辞典、学習研究社、2007年
- ② 渡辺和幸、「コミュニケーションのための英語音声学」、弓プレス、第2刷発行、1999年
- ③ 古藤晃、「大学入試受かる英単語 ソクラテス2088」、学習研究社、1995年
- ④ 古藤晃、「大学入試受かる基礎英単語・熟語 ソクラテス入門 1299」、学習研究社、1996年
- ⑤ 赤松直子、「Children's Garden English for Early Childhood Care and Education Majors 保育英語」、成美堂、第6刷発行、2013年
- ⑥ テルキ デイブ、「aとtheのココロ 英語のものの表し方がわかる」、学研、2013年